

第 52 回九州芸術祭文学賞 選考経過

宮崎県の今年度の応募数は 23 編。前年度より 9 編多かった。男女の内訳は男性 13 名、女性 10 名。年代別に見ると 20 代 1 名、40 代 1 名、50 代 6 名、60 代 9 名、70 代 5 名、80 代 1 名で 60 代が最も多かった。

審査は例年通り応募者の名前を伏せた上で厳正に行い、まず上位 8 編を選んだ。受付順に「アフロディーテの指先」「象の王国」「波濤の先」「フランケンシュタイン症候群」「ガレット 102」「生成り色の矩形」「汽水域の人」「牛」。この 8 編を作品のテーマ、構成、文章力などさらに細部にわたって話し合った結果、「アフロディーテの指先」「ガレット 102」「生成り色の矩形」が残り、「ガレット 102」が地区優秀作に「アフロディーテの指先」が次席に決まった。

以下、受付順に応募作の感想を簡単ではあるが述べておく。

「昭和三十一年一九五六年に生まれて 君は六十二才で先に逝ってしまった」前半の進学高の様子や大学生活のエピソードがやや長すぎ。後半からラストへ向かって展開していくゆきの人生を中心に書いて欲しかった。

「アフロディーテの指先」前半主人公が病院へ駆けつけるシーンや家に着替えを取りに戻り部屋の中を眺める様子などはリアリティがある。だが後半美術館で出会った男との会話はもう少し工夫が欲しかった。しかし作品全体を通して作者の研ぎ澄まされた言葉の選択の質の高さに何度もはっとさせられた。

「末裔」作者の書こうとすることは伝わってくるが 60 枚という限られた枚数ではエピソードを詰め込みすぎて無理があるものの緊迫感はある。

「ミルク色の海」10 月 20 日から翌年 3 月 2 日までの出来事が日記のような形式で書かれているが日付けを取ってしまい、あやの失踪した父親のこと家庭の事情などあやを主人公にして書くといい小説になったのではないか。

「海螢」海幸山幸伝説や回天基地をモチーフに、海で命を懸け散った青年達や肉親と向き合うことになった少年の決意と成長の幻想的な物語はスケールが大きい。

「空に星が、風が東に」55 才で妻に死なれ宮崎に戻り 5 年経つ男が高校の同級生だった美少女の現在を知り過去を思い出すストーリー。たぶんこうなるだろうと読んでいて感じるものはあったが、徳栄のキャラと万里子に寄り添う徳栄のラストはいい。

「紅差し指」主人公の設定は 40 才だが、冒頭の引っ越しシーンの描写からはもっと若い女性に感じる。主人公の父親のキャラ（主人公に注ぐ愛情と視線、言葉）がいい。兄夫婦もいい。この家族の物語を読みたい。

「象の王国」子どものいない夫婦が遺伝子操作技術で生まれた小さな象を飼うという発想は非現実的ではあるが面白い。小さな象を飼った子どものいない若い夫婦が象をシャンプーするシーンでの妻の心の揺れがよく描けている。

「波濤の先」まぐろ船に乗って 40 日間の漁に出た 20 歳の青年の成長物語。船上での描写はドキュメンタリー映画を観ているほどの迫力があり、骨太で力強い作品。

「フランケンシュタイン症候群」人間は自分たちが作り出した創造物に対して恐れを抱くようになる日が来るかもしれない。そう遠くはないかもしれないその日を見ると AI とはわたしたちにとってなんだろうとあらためて考えさせられる作品。発想は面白い。

「ガレット 102」コロナ禍の下町の母子家庭の悲哀と人情を描いた見事な作品。会話文もうまい。一気に読ませる。ただもう少し母と娘の互いの心の奥底を抉り出して欲しかった。

「太陽の散歩道」3 月の終わりに日本にやって来たカリフォルニア生まれの僕の、5 月のゴールデンウィーク明けのサーフィングクラスまでの宮崎での生活が爽やかに描かれた好感の持てる作品。

「祭り」幻想的な描写といい、文章もしっかりしており、物語の運びにも工夫がある。P53 からラストに向かって一気に謎解きのごとく進んでいく展開は推理小説を読んでいるようだ。

「シルバー人材センター」シルバー人材センターで働くそれぞれの人の暮らしや人生、仕事内容が丁寧に描かれているが、シルバーでの出来事を次々と並べるのではなく 2 つくらいに絞り込みそこでの出会いと、甥のことを絡めて書くといい作品になったのではないかな。

「てげてげイージー」東京生まれの男子が大学の同級生の女子の実家を継ぐことになり宮崎に来る。宮崎の風土、方言が爽やかに描かれている。

「はんばもん青春譜」『文学文章に適応していませんが』と作者は梗概に書いているが、この作品は作者の生の言葉で書かれている。作者の真っ直ぐな思いは伝わって来るが、まだ小説にはなりきっていない。削る部分は削りフィクション化した次作を期待したい。

「生成り色の矩形」日本の統治時代の台湾の会社に勤めていた永峰と結婚した原住民の娘の私の語る昔と現在。「現地妻」や宗主国の横暴ぶりは書き込まれてはいるが、決定的な宗主国日本への、そして永峰への恨みは激烈には告発されてもいない。

「汽水域の人」汽水域に棲む鱸をモチーフにした作品であるが、夫との結婚生活の不満が主題なのか陶芸教室の人間関係が主題なのか。文章は丁寧に描かれている。

「ドンキホーテの夢」2003 年 SARS が蔓延する香港を舞台に医療産業廃棄物処理装置の独占契約を巡っての思惑と行動がスピード感をともなって描かれている。

「豪族の女おエイさま」隈城家のおエイがとても魅力的に描かれ、人情豊かな村人たちもいい。

「雲海に見える家」50 代以上の町民の半分以上が I ターン U ターン組の町の雲海に見える家に住む主人公夫婦の穏やかで静かな暮らしぶりが丁寧な文章と会話でよく描かれている。

「牛」主人公の母親が娘に祖父が生きると伝えられずに葛藤を抱えたまま生きてきた姿はよく伝わってくる。牛の出産シーンは生命の誕生の瞬間にやはり圧倒される。

「グラジオラスの花」高鍋から田代台地へとロードムービーのような前半の車中での家族の会話は和やかでいい。しかし全体を通して身辺雑記のようで小説にはいまひとつなりき

っていない。

以上であるが、最後に手書きの場合は誤字に、ワープロの場合は変換ミスに気を付けて欲しい。